

福井支部ニュース

2025年度 第4号

日本科学者会議福井支部

連絡先: 山本雅彦、masahiko@mbp.nifty.com

郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部

支部ホームページ <https://jsafukui.net/>

科学者会議本部 <http://www.jsa.gr.jp/>

今号の内容

- ◆報告 2025年度 JSA 福井支部第3回幹事会の概要 (山根 清志)
- ◆報告 ジャーナリスト小林美希講演会が無事に成功裏に終了 (森 透)
- ◆書評『新しい階級社会 最新データが明かす格差社会の果て』(小野 一)
- ◆追悼 山本富士夫先生の思い出(その2) (永井 二郎)

[報告] 2025年度 JSA 福井支部第3回幹事会の概要

9月15日(月)の「敬老の日」の夕刻、JSA 福井支部第3回幹事会がオンラインにて開催された。定刻の18時に山本事務局長が開会を宣し、森代表幹事の挨拶を得て、審議に入った。審議は予め知らされていた議題の順にすすめられた。

1、山本富士夫氏を「偲ぶ会」について

「偲ぶ会」を、AALA 福井支部と原発問題住民運動福井県連絡会および、JSA 福井支部の3者共催で開く案が出ており、近くその為の鈴木孝典氏、林広員氏、山本雅彦氏の会合が予定されているとのこと。開催時期は10月下旬から11月初旬で、場所は県教育センターが考えられているようだ、とのアナウンスがあった。

2、JSA 全国幹事(北陸地区3県選出)について

前回の第2回幹事会(7/7)で、山本富士夫氏の後任のJSA 全国幹事に

つき森透氏を推薦することを確認していたが、過日全国事務局より石川支部に全国幹事選出の依頼があり、石川支部が塚原俊文氏を推薦することとなった。あらためて、福井支部としては森透氏の推薦は行わないこととした。

3、日本学術会議中部地区科学者懇談会の福井県幹事について

山本富士夫氏の後任の福井県幹事につき、山川修氏が快諾された旨、報告・了承された。

4、能登研と北陸シンポについて

(1) 能登研について

能登研の能登半島地震被災地視察について、福井支部として協賛した。山本雅彦氏が、福井支部から参加しチラシ作成など援助を行った。主催は能登研であり、福井支部としては時間もなくなるとめきれなかったとのこと。

(2) 北陸地区シンポ

今年は富山支部が主体となってとり組むことは決まっているものの、詳細は未定との状況に全く変化なし。

5、第40回原子力発電問題全国シンポジウム2025 京都について

当該原発シンポは、オンライン参加を含めて200名の参加があった。アピールを採択しているが、それについては添付資料を参照されたいとのこと。

6、JJSの電子ジャーナルの利用についてのアンケートについて

この電子ジャーナル作成・利用の目的が、★支部事務局の実務量の軽減、★冊子体ジャーナルの印刷コストの削減(機関誌買取制作費を減らす)、の2点になるというのは理解しやすい。だが、なぜ今このアンケートなのか、アンケート結果をどのように使おうとしているのか、等々さまざまな疑問が噴出し、議論はまとまらなかった。

7、JSA 問題別委員会への参加呼びかけについて

突如今までとは異なるやり方が行われようとすることに疑問が出された。

8、例会について……積み残しの例会の具体化

福井支部で、能登研が行った被災地視察の内容で例会ができないか議論を行い、日程(案)について10月25日(土)が提案され、小野一幹事の方で具体化を進めることになった。議論をして具体的に詰めていくには時間が足りないので、10/6(月)に臨時幹事会を開いて議論することになった。

9、『福井の科学者』について

次号（12月号）発行に向けて。予定されている執筆者：山本雅、寺岡、山岸、高木の各氏から11/10締切り厳守で原稿が出てくれば12月発行は可、との高木担当幹事より説明があった。

10、支部ニュースについて

支部ニュースは小倉担当幹事の尽力によりすでに3号が発行されている。

本日幹事会の概要記事をはじめ数本の投稿が予定・予想されるので、今月末か来月初めには4号が出せると思われる、との担当者の発言があった。

11、会員拡大と会計について

伊藤担当幹事の作成になる資料「会計状況報告 2025年9月16日」において、・財政活動（7月7日以降）、・会費納入状況、・会員拡大、の各項目ごとに分かり易く解説されている。

12、その他 各支部の方から上がってきている各種イベントの紹介であり、ここでは省略する。

最後に、森透福井支部代表幹事の閉会の挨拶があって、第3回幹事会は終了した。終了時刻が20時27分、参加幹事はのべ8名であった。

（山根 清志）

【活動報告】 ジャーナリスト小林美希講演会が無事に成功裏に終了

（支部ニュース2号『小林美希講演会を成功させよう』実行委員会の取組み』の事後報告）

本稿は、『結』第125号（憲法9条の会つくばコミュニティニュース／2025・9・13）に掲載した原稿（「ジャーナリスト小林美希講演会」を開催して）を短く圧縮したものである。本支部ニュース第2号（2025・7・16）に講演会準備段階の原稿を掲載させていただいたので、講演会が無事成功裏に終了したことをここで報告させていただきたいと考える。小林さんは月刊誌『地平』の2025年1月から6月までタイトル「ルポ イバラキ」を6回連載し、その後、単行本『ルポ イバラキー民主主義が消えていく一』（地平社、2025年7月30日、227頁）を刊行している。8月初めに本書をすぐに読んだが、原稿量は6回の連載の何倍になるのか、かなり

の加筆の量だと思われる。詳細なデータと説得力のある内容で、これからの茨城の政治と教育を考えるための必読書であると考え。

8月9日（土）14時からつくばねホールで小林美希講演会を開催したが、猛暑の中、講演会主催者として何人位の方々が来てくれるのか、全くわからず不安が大きかった。チケットは300枚づくり、多くの方々にチケット販売をお願いしたが、どのくらい売れているのかの確認も十分にできなかった。13時ころから講演会の準備のために、多くのスタッフが会場に椅子を150位並べ、14時近くまで準備を行った。14時前にばらばらと参加者が会場に入ってきたが、そのうち、なんと会場の椅子いっぱいとなった。私は嬉しくて、嬉しくてたまらなかった。これだけの多くの方々が小林美希さんの講演を聞きに来られたことに感動で胸がいっぱいであった。司会者の開始宣言のあと、主催者を代表して私がお挨拶をし、多くの椅子が満席になるくらいの方々が参集してくれたことに感謝を述べ、福井に30年以上いて3年前につくば市に転居したこと、福井で小林美希さんの著作（岩波新書）を読んで優れたジャーナリストであることを認識していて、『地平』の連載で久しぶりに小林美希さんとの出会い、改めて優れたジャーナリストであり、茨城県ご出身であることも知り、大井川県政の徹底的な批判を展開されていることで、これはなんとしても講演会を実現したいと強く思い、今日の8月9日講演会に至る過程を語った。

講演会はパワーポイントで行われたが、美希さんの育ちと歩み、大学卒業後の活動、そしてジャーナリストとしての自覚と成長などを語られた。特に、茨城県のパワハラ問題と副知事秘書の自死問題、高校教育の競争主義・業績主義の現実を鋭く批判し1時間半、たっぴりと語っていただいた。会場からは多くの質問や感想が出された。アンケートには、「わかりやすいお話しのかたで、とてもよかったです。名だたる出版社から多数の著書を出版されている方なので、遅まきながらご著書を一冊一冊ていねいに読ませていただき、社会問題に対する目をひらいていかせていただきます」「勇気をもらいました。おかしいんじゃないか？と思っていたこと、やはりそうだったんだと思えました。1人の力は小さくても、あきらめずに生きていきたいと思います」など。『赤旗』2025年8月11日4面に「ジャーナリストが大井川県政を批判」との記事が掲載された。9月7日（日）の県知事選で

は、茨城大学名誉教授の田中重博候補が善戦したが、現職の大井川氏が当選した。自民党が圧倒的な保守地盤の強い茨城県の現状を変えることは難しいと改めて感じているが、今後の日常的な粘り強い改革を目指していきたいと考える。

(森 透 つくば市在住)



【書評】『新しい階級社会 最新データが明かす〈格差社会の果て〉』
橋本健二 著 講談社現代新書 2025/6/19

「1 億総中流」。誇張はあるとしても、かつて日本は中流層に厚みのある平等社会だった。だがそれは昔の話。今日では、経済格差拡大が深刻化している。この問題を継続的に追いかけてきた一人が、橋本健二である。橋本は、『新・日本の階級社会』（講談社現代新書、2018 年、以下「前著」という）で、資本主義を構成する 4 階級（資本家、労働者、旧中間層、新中間層）の下にアンダークラスが出現し、日本が「五階級社会」化したことを明らかにした。その後の「2022 年三大都市圏調査」もふまえ、格差社会の現状をより詳細に描き出したのが『新しい階級社会／最新データが明かす〈格差社会の果て〉』（講談社現代新書、以下「本書」という）で、2025 年 6 月の刊行である。

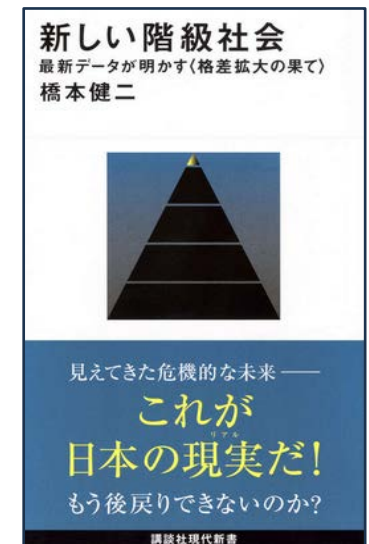
まずは事実確認から。本書の冒頭では、ジニ係数（完全平等社会では 0 で、所得配分が不平等なほど限りなく 1 に近づく）を用いて格差拡大を検証する。2000 年代前半に日本の格差社会化がいよいよ深刻なものとして語られたが、現実には、1980 年前後から格差は急速に拡大していた。「2022 年三大都市圏調査」は、おおむね、前著の知見を裏書きする。前著の第 3 章 6 節「哀しみのアンダークラス」は、本書では第 4 章に「格上げ」され、より詳細に叙述される。アンダークラスでは、格差認識、自己責任論への態度、所得再配分政策への支持などで、他の 4 階級と異なる傾向が見られる。とはいえ、各階級間の相違はそれほど顕著でなく、政党支持にも反映されにくい。格差拡大をひしひしと感じながら、現実是不変なものと諦めに似たムード。不利な立場の者が自己責任論を内面化してしまうところに現代日本の問題点がある、との湯浅誠の指摘とも通ずるように思われる。

ここで分析を止めてはいけない。既存理論では差異が明瞭に示されなくとも、日本政治の変化は確実に進行しているのだから。橋本は、所得再分配、憲法・沖縄問題、排外主義に関する質問項目の分析から、5 つのクラスター（よく似た回答者の集まり）を析出し、リベラル、伝統保守、平和主義者、無関心層、新自由主義右翼と名付ける。規模は小さいが注目すべきは新自由主義右翼で、橋本はその特徴を次のように要約する。「つまり「新自由主義右翼」は、高学歴かつ高収入で、多くの資産を所有する、主に男性たちである。自分たちの経済的利害に忠実に、自己責任論を支持して所得再分配に反対する人々である。そして日本が憲法改正によって軍隊をもつことを強く支持し、沖縄への米軍基地の集中を容認し、そして外国人に対しては排外主義的な態度を示す人々である。原子力発電所の廃炉に反対し、戦争を人間の本能によるものだと容認し、同性愛などの性的多様性を否定する傾向も強い。また自民党支持率が高く、その支持基盤の中核に位置している」（本書 306 頁）。

この箇所を読んだ評者（ドイツ政治研究者）が条件反射的に思ったこと。「ドイツのための選択肢（AfD）にそっくりだ」。（すべてではないが共通性かなりある）

近年、欧米諸国を悩ます右翼ポピュリズムの台頭。その主張や背景はさまざまだが、既成政治やエリートは自分たちに構ってくれないとの民衆の閉塞感が底流にある。一見、突発的でも、その予兆は水面下で進行しているのかもしれない。ついにながら、2025 年夏の参院選での参政党の躍進など、本書の原稿執筆時点では知るよしもないが、新自由主義右翼の存在を明らかにしていた意味は大きい。綿密なデータ分析を通じ現代政治のダイナミズムを解き明かす洞察に、この種の研究の醍醐味がある、と実感させられた一冊である。

(小野 一)



[追悼] 山本富士夫先生の思い出（その2）

山本富士夫先生の思い出（その1）では、主に卓球にまつわる話を記しました。その記事を投稿したすぐ後の2025.9.14に、福井大学卓球部OB会が学内体育館で開催されました。OB会では、長らく監督を務められた山本先生への黙禱に始まり、参加した20数名がそれぞれの思い出話を語っておられました。OB会事務局長よりお香典袋を預かることになり、私は何としても（できれば年内に）お参りに伺う段取りをするべく、ご家族にコンタクトをとり始めたところです。今回の思い出は、卓球から一転して、山本先生の研究活動の一部とそれに私が関係した側面をご紹介しますと思います。

私は山本先生の研究活動全てを把握してはおりませんが、私が1993年に福井大学に着任した以降、山本先生の研究キーワードは間違いなくPIVと言えます。PIVとは、Particle Image Velocimetryの略語で、日本語でいえば粒子画像速度計測法となります。空気・水・燃焼ガスなどの流体の流れ場（速度分布、圧力分布）と温度場（温度分布）を扱う流体力学という学術は、発電プラントや内燃機関、風力発電、飛行機、ポンプ等の流体機械の特性を解明し、性能向上を図る上で大変重要な学問分野といえます。流体力学の基礎方程式である連続の式（質量保存）、ナビエーストークスの式（運動量保存）とエネルギー式の3つの偏微分方程式を数値的に解くことが出来れば、コンピュータ上では全ての特性が明示されます。ただ、現実の様々な機械における流れ場はコンピュータが示す解と異なることも多く、実際に速度分布を計測する必要が生じます。その時にPIVが活躍します。私はPIVの専門家ではありませんが、山本先生らから聞いた記憶の範囲でいえば、1980年代には流体系の国際会議においてPIVが議論され始め、90年代に関心が高まり、2000年代には実用化が始まったと言われています。山本先生はまさに、その先駆者のお一人と言えます。そして、日本の可視化情報学会が中心となって日本国内においてPIVに関する第1回国際会議を1995年に開催するにあたり、議長は東京大学の小林敏雄教授が務めましたが、開催地は福井に決まり実行委員長に山本先生が就きまし

た。普通に考えれば、東京で開催する流れになるはずですが、あえて山本先生を実行委員長として福井開催になったことは、国内および国際的な山本先生の主導的な立ち位置を示していると思います。そして永井は、関係する若手研究者として、この国際会議の事務局のお手伝いをしました。通常の学会受付業務に加えて、海外研究者の様々なリクエストに対応した記憶が今でも残ってまして、確かスイスから来た方だったと思いますが、「会議終了後に、高野山に行きたいのだが、どうすればいいだろうか？」と聞かれ、あわてて分厚い時刻表を開いて何とか切符の手配が出来ました。この福井開催PIV国際会議は大変好評となり、確か第2回も福井開催が決まり、山本先生のリーダーシップが発揮されました。山本先生は、このPIVを中心に流体力学に関する多数の論文を発表し、博士の学生も多く育成しました。私は90年代末から2000年代にかけて、水の電気分解による水素製造に関する研究に従事しましたが、その時に山本研との共同研究として、電気分解で発生する水素泡と酸素泡を含む気液二相流の可視化とPIV計測に取り組み、共著でいくつか論文を発表することが出来ました。山本先生の論文添削作業は、ほぼいつも深夜に行われ、山本研の学生さん達も何かと大変な面もありましたが、今となっては皆よい思い出です。

（「その3」へつづく）

（永井 二郎）

＜＜編集後記＞＞

2025年度支部ニュース第4号をお届けします。

新聞の政治欄はほぼ自民党総裁選一色、TVは裏金・企業献金問題も他の懸案課題もそっちのけの候補者討論会を毎日流しています。ところで、韓国では尹錫悦前政権との癒着問題で「統一教会」の韓鶴子総裁が逮捕されました。安倍元首相の銃撃殺害事件では、現場で拘束された容疑者が「統一教会」への恨みと言っていたのに当初警察は公表せず、報道でもあいまいにされていました。日本では「統一教会」が多数の自民党議員と組織的關係・癒着があり、「党内調査」でも明らかなのに、未だに清算されずにいます。総裁選候補者にも高市早苗氏が筆頭に「統一教会」との接点が多数指摘されていますが、日本の検察組織・司法組織は裏金でも統一教会問題でもほぼ動かず、韓国の組織に「遅れを取って」います。日本のジャーナリズムには是が非でも奮起を・・・。

（OG.）